紀要『人文・自然研究』第 15 号

ウィリアム・モリスと詩のコックニー派
――『グウィネヴィアの弁明とその他の詩』を契機として

江澤美月

2021 年 3 月 25 日発行
一橋大学 全学共通教育センター

人文・自然研究　第 15 号

Hitotsubashi Review of Arts and Sciences 15

2021 年 3 月 25 日発行

発行：一橋大学全学共通教育センター

186-8601 東京都国立市中 2-1

組版：精興社

ウィリアム・モリスと詩のコックニー派

――『グウィネヴィアの弁明とその他の詩』を契機として

江澤美月

1. はじめに

今日ウィリアム・モリス（William Morris, 1834–96）は、デザインの分野で注目されることが多いが、本稿では、モリスの詩人としての側面に注目したい。彼の最初の詩集『グウィネヴィアの弁明とその他の詩（*The Defence of Guenevere, and Other Poems*）』（1858）には、今日ラファエル前派の創設者の一人であるダンテ・ガブリエル・ロセッティ（Dante Gabriel Rossetti, 1828–82）への献辞があり、1973 年にモリスの批評集を編集したピーター・フォークナー（Peter Faulkner）は、アーサー王伝説を基としたモリスの『グウィネヴィアの弁明とその他の詩』が、ラファエル前派の詩集として批判をされたことを指摘している（Faulkner 6）。しかしフォークナーが最も激しいモリス批評と指摘する 1858 年の 11 月 20 日付の『サタデー・レビュー（*Saturday Review*）』を再見すると、同誌はモリスをラファエル前派の詩人として批判していることに加え、ロマン派の詩人、ウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth, 1770–1850）、ジョン・キーツ（John Keats, 1795–1821）、そしてアルフレッド・テニスン（Alfred Tennyson, 1809–92）との関係で批判されていることがわかる。ワーズワスは 1843 年に、テニスンは 1850 年に桂冠詩人になっているので、1858 年の時点で、一番評価が見えにくいのはキーツである。以上のことを踏まえ、本稿では、『サタデー・レビュー』がモリスの『グウィネヴィアの弁明その他の詩』に対して行った批判を再読する。

2. 『サタデー・レビュー』によるモリス批判

最初に、冒頭で触れたモリスの『グウィネヴィアの弁明とその他の詩』に対する『サタデー・レビュー』の批判に関して確認する。この批評を収録したフォークナーは、アーサー王伝説を基としたモリスの表題詩を含むこの詩集が、彼の友人であったアルジャーノン・チャールス・スウィンヴァーン（Algernon Charles Swinburne, 1837–1909）やロセッティの高評価を得た一方で、批評家の不評を買った原因を次のように分析している。

> しかし 1858 年の批評家は確かに新しい詩人に寛大ではなかった。彼らはその詩が奇妙で難解だと思い、モリスに対し、書かれたものに対して憤慨したのとは異なる口調で、やり方を改めるように忠告した。この誤解そして敵意を説明するために『グウィネヴィアの弁明とその他の詩』は、初めて現れたラファエル前派の詩集であったことを思い起こす必要がある。つまり、ダンテ・ガブリエル・ロセッティもクリスティーナ・ロセッティもスウィンヴァーンも雑誌を除いては詩集を上梓していなかったのである。したがって、ラファエル前派の画家たちが徐々に姿を現してきているという広く普及した疑いが、躊躇なくモリスの詩に転嫁されたのだった。ロセッティは背後から詩の軍勢を率い、一方モリスは先陣で犠牲を払ったのだ。（Faulkner 6）

フォークナーが指摘するように、『グウィネヴィアの弁明とその他の詩』が出版されたのはラファエル前派の雑誌として知られる『ジャーム（*The Germ*）』（1850）そしてモリスが編集しロセッティが寄稿した『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン（*Oxford and Cambridge Magazine*）』（1856）の後である。しかし、スウィンヴァーンの『皇太后ロザムンド（*The Queen-Mother; Rosamund*）』は1860年、ロセッティが扉絵を描いた妹クリスティーナの『ゴブリン・マーケットとその他の詩（*Goblin Market and Other Poems*）』は1862年、そしてロセッティ自身の詩集『*Poems*（詩集）』は1870年と、いずれもモリスの詩集よりは後の発表になっている。これらのことを踏まえ、フォークナーは、ジョン・スケルトン（John Skelton, 1831-1897）が回想録『シャーリーのテーブル・トーク（*Table Talk of Shirley*）』（1895）で示したロセッティ、およびロセッティの一派に対する嫌悪感、「男らしくなく、女々しいこと」（Faulkner 7）を基に、『グウィネヴィアの弁明とその他の詩』に対する批判は、1860年代におけるロセッティに対する批判を先駆けていると考察している。

しかし、フォークナーがそのように指摘する『サタデー・レビュー』の批判を見ると、同誌がモリスをラファエル前派として批判したことには、続きがあることがわかる。

> モリス氏はラファエル前派の詩人である。そのように、我々が思うに、彼は自任し、ラファエル前派のメンバーからそう思われている。さて、事実の観点から、もし我々が、ラファエル前派と呼ばれるのを気取っているものの起こりを辿るならば、ある詩派や詩の主義の元祖というよりは、むしろ後継であろう。ラファエル前派主義は、最初ワーズワスによって唱道され、キーツを経由してテニスンで頂点に達している。詩人が預言者のように画家を先導した。つまり、芸術の二次元的表現、どちらかといえば絵画的発達が、詩的な芸術の発展に倣ったのである。ミレイやホルマン・ハントは、ワーズワスの詩の民謡集が始めた、間違った嗜好に対する反抗を、繰り返してきたに過ぎないのである。（*Saturday Review* 506）

ここを読むと、なぜラファエル前派であることが批判の対象になるかの理由として、同派の前にワーズワスに端を発し、キーツを経由してテニスンで頂点に達した別の派が存在し、しかもその派は詩の一派であったことがわかる。ここには詩と絵画の相似性が指摘されているが、このことは、ワーズワスが『抒情民謡集（*Lyrical Ballads*）』（1798）の1802年版の序文で指摘していることである（Stafford 102）。また、ワーズワスが始めた反抗とは、古典の伝統に倣い韻など詩的語法に頼るのではなく（Burgum 208）、日常語、すなわち社会の中の中産階級、あるいは下層階級の言葉を用いたこと（Stafford 3）であろう。したがって、『サタデー・レビュー』は、ラファエル前派の、例えばジョン・エヴァレット・ミレイ（John Everett Millais, 1829-96）が、「両親の家のキリスト（*Christ in the House of His Parents*）」（1850）で、従来のように聖家族を世俗を超越した姿で描くのではなく、実際に大工の工房を取材し、実際の労働者の家族の姿で描いた卑俗さが批判されたこと（Nixon 86-88）と重なり合う、と指摘しているのである。

このように労働者の姿を現出させたことが問題となっていることが確認された上で、「キーツを経由してテニスンに至る」とはどのような意味なのだろうか。ここで、『サタデー・レビュー』以外の当時の『グウィネヴィアの弁明とその他の詩』評を探すと、1858年2月の『スペクテーター（*Spectator*）』が、この詩集を次のように評している。

ウィリアム・モリス氏の詩は、主にアーサー王の時代の騎士と貴婦人に関するもので、残りの作品のほぼ全ては、騎士道のぼんやりとした伝説の時代のものである。とはいっても詩人は自分の詩に、現代の調査や評価が野卑で不道徳と見做した加筆を行っているのだが。我々の好みからすると、そのスタイルは、これ以上ひどくならないほどひどい。モリス氏は、欠点以外は殆ど真似をしない。彼はコックニー派のいやに涙もろい単純さと、テニスンの最悪の一節のうんざりする露骨さを兼ね備えている…。

（*Spectator* 238）

ここでは、モリスの詩の野卑さが問題視され、テニスンと共に、コックニー派の作風が、モリスの詩の特徴として挙げられているが、実はコックニー派は、テニスンそして『サタデー・レビュー』が言及したキーツに深い関わりがある。テニスンの友人アーサー・ヘンリー・ハラム（Arthur Henry Hallam, 1811–33）が、キーツの後継者としてテニスンの最初の詩集『主に抒情的な詩（*Poems, Chiefly Lyrical*）』（1830）の書評を依頼した相手であるリー・ハント（James Henry Leigh Hunt, 1784–1859）(1)は、かつてキーツと共に、「詩のコックニー派」として、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン（*Blackwood's Edinburgh Magazine*）』から批判を受けているからである。このことはハラム自身がテニスンの詩集の書評で指摘していることでもある。

我々は躊躇することなく確信を表明しよう、コックニー派は（この呼称は、同派が偶然居合わせた環境を皮相的に見て嘲笑的につけられたものであるが）ミルトンの時代からこの国に存在するいかなる芸術形式よりも純粋なインスピレーションを持ち、それが奉じる真実の分け前に預かって従っていた。コックニー派の中心人物（カポセッタ）はリー・ハント氏であり、ハント氏は、その方向性を示す以上のことは出来なかったが、彼の目指した目的は、無数の個人の思惑や政治的な立ち位置によって、歪曲して伝えられていた。しかしハント氏は非常に優れた性質をもった二人の人物に付き従われていた。彼等は、生まれながらの詩人であり、生存中は詩人として活躍し、余りにも早く墓へと赴いた詩人であった。シェリーとキーツはまさしく対極に位置する天才だった。

（[Hallam] 617、下線で示した強調は原文によるもの）

それでは、コックニー派はなぜ批判されたのか。その一つの答えを示していると思われるのは、キーツの友人チャールズ・アーミテージ・ブラウン（Charles Armitage Brown, 1786–1842）から伝記の資料を譲り受けたリチャード・モンクトン・ミルンズ（Richard Monckton Milnes, 1809–85）が、1848年に上梓したキーツの伝記『『ジョン・キーツの伝記、書簡と遺稿（*Life, Letters and Literary Remains of John Keats*）』である。

当時文芸批評は、類いまれな政治的複雑性を呈していました。既得権と力によって達成された秩序の擁護者が、フランス革命が作り出した希望や夢に対して勝利を収めました…。（中略）フランス革命が人の心に与えたもの、直接跳ね返って来た結果に抗って自らの血を流し財産を犠牲にした人たちが悟ったことを推定することは到底できませんし、これが自由だと言われた時、なんらかの不寛容が、ナポレオンの体制や博愛の体制や「恐怖政治」に対して容赦されたことも、想像の域を超えます。偽善的なワーズワスや政治的なサウジーは、フランス革命の夜明けには勝利の歌で寿ぎましたが、殺戮の頂点には恐れて逃げ去りました。恐ろしい現実を前にして、想像力に歯止

めをかけ、自分の正邪の感覚を鈍らせずに、思いやりを持ち、公正な決定をする人は殆ど残りませんでした。

しかし、その僅かな人たちの中に、「詩のコックニー派」と中傷を受けた文筆家たちが存在したのです。（Milnes I 195-196, 強調は原文によるもの）

ここには、フランス革命が「詩のコックニー派」批判の背後にあったことが示されている。この引用の中には、ワーズワスが革命の先鋭化に伴い、保守化したことが指摘されているので、上掲の『サタデー・レビュー』の指摘との関連から、被支配者階級、特に労働者階級を想起させる言葉の選択が、同階級への共感と見做され、問題視されたと考えられる。

3. 詩のコックニー派からモリスへ

つぎに『サタデー・レビュー』がワーズワスからキーツを経由してテニスンへと至る派をラファエル前派の原型としていたことを、各詩人に注目して確認すると、彼らは先代の詩人と何かしらのコンタクトを持っている。それと同時に、彼らの背後には、ハラムがコックニー派の中心人物と述べたリー・ハントの存在が、常に浮かびあがってくることがわかる。

(1) ワーズワスからキーツへ

ワーズワスとキーツの関係を考えた時に、重要な役割を担っているのは、両者と共に友人関係にあった画家のベンジャミン・ロバート・ヘイドン（Benjamin Robert Haydon, 1786-1846）である。キーツは 1816 年 11 月 26 日、ヘイドンへの手紙で、彼がワーズワスへ詩を送ってくれると聞き、感激している。

あなたがそれ［詩］をワーズワスへ送ってくださるという考えに、息が止まりそうです。わたしが、どれほどの敬意をもって彼に好意を伝えたいと思っているか、お分かりでしょう。（Rollins I 118）

1958 年にキーツの書簡を編集したハイダー・エドワード・ローリンス（Hyder Edward Rollins）は、ヘイドンはすぐにキーツの詩をワーズワスに送らず、12 月 31 日まで手元に置いておいたと指摘している（Rollins I 118 n. 4）。ワーズワスからヘイドンに返信が来るのは、年が明けた 1 月 20 日であり、その手紙で彼は次のように書いている。

駆け出しのキーツに関するあなたの説明は、少なからず私の興味を引きました。ソネットはとても有望なものと思われます。もちろんあなたもわたしも、構成にはお世辞は言えないので、全く公正とはいえませんが。しかし、確かに確固として構想されており、よく表現されています。リー・ハントの賛辞は、的を射ています。そしてソネットは非常に心地よく締めくくられています。（Selincourt III 1367-1368）

ワーズワスが述べているリー・ハントの賛辞とは、キーツのヘイドンへの手紙の日付が 11 月 26 日、そして上述のワーズワスの手紙の日付が 1 月 20 日であることから考えて、彼がキーツを、パーシー・ビシュ・シェリー（Percy Bysshe Shelley, 1792-1822）やジョン・ハミルトン・レノルズ（John Hamilton Reynolds, 1796-1852）と共に文壇に紹介した、

1816年12月1日の『エグザミナー（*The Examiner*）』の記事、「若い詩人（“Young Poets”）」のことであろう。この記事を見ると、この時リー・ハントはキーツのソネット「はじめてチャップマン訳のホーマーを読んで（“On First Looking into Chapman's Homer”）」を引用しているから（Hunt 1816 761-762）、上記の引用でワーズワスが称賛したキーツのソネットは、これとわかる。このように、ワーズワスはリー・ハントの評価を介在してキーツを評価している。

ここで重要なのは、キーツの側も、公の場ではワーズワスに直接敬意を表するのではなく、リー・ハントに敬意を表することで、リー・ハントの評価を追認したワーズワスに対し間接的に敬意を表していることである。この後キーツは、翌年、はじめて『詩集（*Poems*）』をリー・ハントへの献辞を載せて発表し、リー・ハントの側は1817年6月1日の『エグザミナー』でその書評をして、キーツの敬意に答えた。『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』の編集者ジョン・ギブソン・ロックハート（John Gibson Lockhart, 1794-1854）が、Zの筆名で詩のコックニー派批判を始めるのは、その4か月後である。

しかし、ロックハートも、詩のコックニー派の背後には、ワーズワスがいるのではないかと疑っていた。1817年10月の第一回の「詩のコックニー派について（“On the Cockney School of Poetry”）」は、冒頭部分で、話の内容がチョーサー、スペンサー、シェイクスピア、ミルトン、バイロンについてであるとしたうえで、その次に「（我がイングランドのダンテ）――ワーズワス――ハント、キーツ」とワーズワスをリー・ハント、そしてキーツと並べているからである（Z 1817 38）。実際第一回の批判の本文中で彼は、リー・ハントがワーズワスを崇拝していると揶揄してもいる（Z 1817 40）。このことから、モリスを批判した『サタデー・レビュー』の論者が、キーツの前にワーズワスを持ってきているのは、彼独自の見解ではなく、1817年の詩のコックニー批判にまで、遡ることが出来る見解であるとわかる。

さて、当初ワーズワスを批判の原点に据えたロックハートは、その後批判の対象を、リー・ハントを中心とした一派へと絞っていくが、それは、雑誌『エグザミナー』の編集者としてリー・ハントが、1815年に制定された穀物法や1817年の人身保護法の停止などに代表される王侯貴族や地主など、既得権者の権利を擁護する政策をとり続けたトーリ党政権を、厳しく追及していたからである[(2)]。ロックハートは、先に触れた第一回目の詩のコックニー派批判で、リー・ハントについて、「機知に富んだ文章、詩、そして政治で途方もない主張をするのに長けた男」（Z 1817 38）とその政治性を批判し、翌年1818年8月には、そのリー・ハントに献辞を捧げたキーツに対し、キーツは詩のコックニー派のみならず、政治のコックニー派に属している（Z 1818 524）、と批判するに至っている。

この状況を遡及的に説明しているのが、上述のミルンズによるキーツの伝記を書評した1848年9月19日付の『タイムズ（*The Times*）』である。

> 批評家に責任がないとは言えなかった。批評家は自分たちの力を喜んで見境なく使い、その機会を思う存分利用した。ヨーロッパの平和、秩序の勝利、フランス革命の恐ろしい記憶、コルシカ島出身の皇帝の没落が、保守主義を求め民主主義の構想を問い質す批評家のペンに、尋常でない力を与えた。キーツの仲間は、詩人であり抜け目のない政治家でもあった。一人、まさしく、中心人物であり、最も影響力のある者は、当時の皇太子殿下に対し不敬な文を書くという目に余る行為を行った罰として収監された。政治的な党派だと思い込んだ文芸批評家が、筋金入りの急進派だとして夢見がち

な詩人を攻撃し、その著作をあざけったのは、間違いなく件の男が嫌いだったからである。潰したいのは山々だったが、攻撃の仕方は、詰まるところ恐る恐るであった。

（[Phillips] 3）

1971 年にキーツの批評集を編集した G.M. マシューズ（G.M. Matthews）は、この批評は『タイムズ』の専属批評家であり、ロックハートとあまり政治的スタンスが変わらない批評家であるサミュエル・フィリップス（Samuel Phillips, 1814–54）によるものと説明している（Matthews 320）。この引用で、フィリップスは、フランス革命に恐怖を感じた既得権者が保守化したというミルンズの指摘を受け、既得権者の意向を汲んだ批評家が、民衆の主張を尊重する価値観を問い質す観点から批評活動を行ったこと、そうした状況下にあってキーツと彼の仲間であり、中心的人物とみなされた男の活動は、極めて政治的と解釈された、と述べている。その男とは、上の引用でロックハートがリー・ハントの政治性を指摘していたことから、リー・ハントを指すとわかる。つまり、ロックハートを筆頭とする保守化した批評家にとって、フランス革命に象徴される共和制政治の構想は、到底容認できない危険性をはらんだものであり、共和制政治に対する恐れが、穀物法撤廃を唱え、人身保護法の停止撤廃を主張したリー・ハントそして彼に敬意を表したキーツに対し、詩のコックニー派批判という容赦ない批判となって表出したのである。

(2)　キーツからテニスンへ

テニスンの場合には、彼の親友、アーサー・ヘンリー・ハラムが、キーツとテニスンを結びつける役割を果たしているが、ここにもリー・ハントの介在がある。ハラムは、テニスンが第一詩集『主に抒情的な詩（*Poems, Chiefly Lyrical*）』（1830）を上梓した時、1831 年 1 月 18 日と推定される手紙で、当時『タトラー（*The Tatler*）』の編集者であったリー・ハントに、テニスンをキーツの後継者として推薦し、書評を依頼しているからだ。

アポロンの末裔であるジョン・キーツの死以来、文芸の中心であるパルナッソス山の我がイギリス領土は、ぼろ切れや継ぎはぎだらけの服をまとった王らしからぬ王によって威張り散らされています。しかし、私の思い違いでなければ、真の世継ぎが見つかったのです。この数冊の詩集に対する私の判断に賛同してくださるのなら、あなたはきっとご自分が現在主宰していらっしゃる『タトラー』誌で、好意的に取り上げて下さることでしょう。

（Kolb 396）

これに応え、リー・ハントは 2 月 24 日の『タトラー』で次のように述べた。

我々はこの二人の若者の登場が良い時代であること、二人が執筆する環境、つまり世間的に成功することが、二人の世間にうとい精神に影響を与えないと考えられる環境を羨しく思う。二人は狭量な要求や、苦痛を与える敵意のいずれによっても自分たちの目的追求を反らされることがないように思えるからだ。あの頃はそれほど昔ではないが、今はシェリー氏やキーツ氏の時代とは異なる。テニスン家の人たちは、あの頃よりも幸せな時代に登場した。二人は世間の憶測と戦う必要も、真と美を信仰したがために殉教者となる必要もないのである。

（[Hunt] 593）

リー・ハントが二人の若者といっているのは、彼はこの時、彼がテニスンの兄弟であるチ

ャールズ・テニスン（Charles Tennyson）の詩集『ソネットと折々の作品（*Sonnets and Fugitive Pieces*）』（1830）の書評も行っているからである。この頃は約20年ぶりにトーリ党からホイッグ党のグレイ政権（1830–1834）に政権交代し、選挙法改正（1832）運動が盛り上がりを見せていた頃である。リー・ハントはテニスンの時代は、キーツやシェリーの頃とは違うと述べ、詩のコックニー派批判を断ち切ろうとしている。しかしそうはならなかった。リー・ハントに称賛されたテニスンは、再び詩のコックニー派として批判されることになるからである(3)。

依然として残った政権と一般民衆との距離感は、キーツと共に詩のコックニー派と見做されたパーシー・ビシュ・シェリーの遺稿「無秩序の仮面行列」の出版からも垣間見ることが出来る。この詩は元来シェリーが、1819年8月16日に起きた「ピータールーの虐殺」事件に際し、トーリ党のリバプール政権による民衆弾圧を批判したもので、彼の存命中は出版が見送られ、1832年の選挙法改正の年になっても、シェリーが批判した閣僚の名前を全面開示することは出来ず、1842年になってはじめて無削除版が出版された。この時、既に『無秩序の仮面行列』（1832）を選挙法改正の書として提示していたリー・ハントは、チャーチストであるジェイムス・ワトソン（James Watson, 1799–1874）に出版を委ね、選挙運動への道筋を示すことによって労働者階級の暴力による改革運動を牽制している(4)。一方、政権中枢部にとって、民衆による暴力蜂起は、革命の火種となることを避けるため、是が非でも回避しなければならない課題だった。トーリ党の流れを汲む保守党の第二次ロバート・ピール政権（1841–46）が、1846年、長年トーリ党そして保守党の支持基盤である地主階級の権益を守る役割を果たしてきた穀物法の撤廃に踏み切ったのは、まさしくこの課題があったからである。ミカエル・ラスティッグ（Michael Lusztig）は、「ピールの謎を解く　穀物法撤廃と制度保持（“Solving Peel’s Puzzle: Repeal of Corn Laws and Institutional Preservation”）」で、ピールは穀物の不作を背景に、自由貿易を掲げる反穀物法運動の担い手が、中流階級から労働者階級へと移るに及んで、1846年3月4日庶民院でのスピーチで、エドモンド・バーク（Edmund Burke, 1729–97）の『フランス革命に対する省察（*Reflections on the Revolution in France*）』（1790）からの一節を引用し、民衆からの要求に対する、イギリスの貴族とフランスの貴族の違いは、特権を放棄する時期を心得ていたか否かである、と述べて、穀物法廃止へと踏み切った、と説明している（Lusztig 399）。

テニスンは、リー・ハントのように労働者側に寄り添うか、あるいは政府のように距離をおくかの間にあって、徐々に前者から離れ後者の立場に近づいていき、1842年の『詩集』をリー・ハントに批判されている(5)。そして1850年、ワーズワスの後空席となった桂冠詩人の座を、女王への敬意と共に共和制主義者として人を貧富の差なく尊重すると自薦したリー・ハントと争い（Hunt 1850 III 274–278）(6)、桂冠詩人になっている。

(3)　テニスンからモリスへ

モリスの場合はどうだろうか。彼が直接敬意を表したのは、先代の詩人テニスンに対してではなく、ラファエル前派のロセッティに対してだった。『グウィネヴィアの弁明とその他の詩』の扉部分には、かつてキーツがリー・ハントに対する献辞を載せたように、ロセッティへの献辞がある。これが、モリスの詩集を批判した『サタデー・レビュー』がモリスはラファエル前派の詩人であり、ラファエル前派の原型として、ワーズワスからキーツを経由してテニスンへと至る派が存在する、とのべた所以であろう。

献辞を受けたロセッティは、1859年7月18日、エリザベス・ギャスケル（Elizabeth

Gaskell, 1810-65）に宛てた手紙の中で、モリスの詩を、桂冠詩人であるテニスンの詩に引けをとらないものとして絶賛している。

> わたしはあなたに、グウィネヴィアの本が、どの程度お気に召すものであったかはお尋ねしません。なぜなら、わたしはこの時までに、あなたがそれをとても気に入っていらっしゃるに違いないと確信しているからです。これはあなたが仰せの通り、静かな場所で読むために書かれた本です。生意気を承知で申し上げるならば、わたしはこの本のアーサー王の部分は、ちょうど出版されたテニスンの『国王牧歌』を（昔の騎士物語の感動的な話そのものに迫っていて）凌ぐ価値があると思います。もちろんテニスンの詩は、リズム、仕上がり、全ての現代的な完璧さにおいて素晴らしいのですが。
> （Fredeman II 263）

実は、ロセッティがギャスケルに手紙を書いたのは、モリスのこの本の話をするのが主目的ではなく、自分が手掛けていたダンテの『新生（*La Vita Nuova*）』（1290-94）の訳を、ギャスケルに校正してもらうためだった(7)。そのためか、返信でギャスケルは、モリスの本には触れていない（cf. Chapple and Shelston 199-120）。しかし、ロセッティがギャスケルへの手紙の中で、モリスの詩集に言及したのは、モリスの詩集が素晴らしかったことに加え、リー・ハントという共通の知人がいたからかもしれない。1848 年ギャスケルは、最初の小説『メアリ・バートン（*Mary Barton*）』で、穀物法撤廃を背景に、従来対立関係にあると見做されていた中産階級と労働者階級の融和を描いた。この作品は、リー・ハントの目に留まり、彼は 1850 年『リー・ハントの自伝、友人と同時代の回想（*The Autobiography of Leigh Hunt, with Reminiscences of Friends and Contemporaries*）』の中で、称賛され（Hunt 1850 III 271）、彼女はその後彼と実際会ってもいる(8)。

一方、ロセッティは、リー・ハントがキーツとシェリーを称賛している『バイロン卿と同時代人（*Lord Byron and Some of his Contemporaries*）』（1828）を筆頭に、かねてから彼の著作に親しんでいたから（Rossetti II 36）、彼が自伝の中でギャスケルを高く評価したことにも当然気付いていただろう。ギャスケル同様ロセッティもリー・ハントに会っている。ロセッティは 1847 年 12 月下旬から 1848 年 1 月初旬にかけて、リー・ハントに数編の詩とともに手紙を書いて送り、三か月後の 3 月 31 日に、「ダンテのような天国」を表現していると称賛された（Fredeman I 49-52 cf. 63）。ロセッティはこの時の喜びを、叔母シャーロットへの 1848 年 4 月 12 日と推定される手紙で、次のように語っている。

> 少し前、わたしは自分の詩のうちいくつかをリー・ハントに送り、お目通しをお願いし、将来有望かどうかご判断を仰ぎました。リー・ハントの御評価は、過分なものでしたので、うぬぼれだと思われないように、引用はやめておきます。
> （Rossetti II 37）

この後、恐らく叔母にせっつかれて、ロセッティは、6 月 1 日と推定される手紙で、「ダンテのような天国」を表現していると評されたと告白するのだが、弟のウィリアム・マイケル・ロセッティ（William Michael Rossetti, 1829-1919）によれば、リー・ハントのこのコメントは、主に「祝福された乙女（“The Blessed Damozel”）に関するものである（Rossetti II 38）。

注目すべきことは、ロセッティのこの詩が、彼とリー・ハントの出会いのきっかけとな

るにとどまらず、彼とモリスとの出会いのきっかけともなっていることである。モリスは1856年1月1日、編集者兼出資者として、『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン（*Oxford and Cambridge Magazine*）』を創刊した。この創刊号には、彼の友人エドワード・バーン＝ジョーンズ（Edward Burne-Jones, 1833–98）による「祝福された乙女」賛美が掲載されている。

> なぜ「祝福された乙女」とキアロの物語の作者が、人口に膾炙しないのだろか。
>
> （Fredeman II 101 n. 4）

この記述に目を止めたロセッティは、友人ウィリアム・アリンガム（William Allingham, 1824–89）に宛てた1856年5月6日と推定される手紙で、次のように述べている。

> 『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』のあの記述は、今までわたしに起こったことの中で最も愉快なものでした。本当にそう思います。わたしは、これは同じ用向きでわたしのもとを訪れたあなたの古い知人であるケンブリッジのフライヤーの仕業に違いないと思いました。ところが未知の知人であるジョーンズによるものとわかったのです。ジョーンズは先日ロンドンにいたので、［労働者大学の協議会の何人かは顔なじみでしたので］、「夢の国」の最も優れた若者の内の一人に会ってきました。なぜならそこにあの不思議な文学作品の作者のうちの最も優れた人がいるように思えたからです。確かにこの雑誌は、『ジャーム』のやり方で出てきましたし、『ジャーム』とタイアップするかも知れません。しかし、『アイドラー（*Idler*）』よりどれ程よいかわからないくらいです。わたしは毎月見ています。新しい号には、「夢」という題の話が掲載されていますが、わたしはその作品が精彩を放っていると思っています。
>
> （Fredeman II 100–101）

ロセッティがこの手紙で言及したジョーンズは、バーン＝ジョーンズのことであり、二人は1856年の2月下旬から3月上旬にかけて実際に会っている（Salmon 16）。しかし、ロセッティが本当に会いたかったのは、バーン＝ジョーンズではなく、彼がこの手紙で称賛している「夢」の作者、モリスだったようだ。ロセッティに会ったバーン＝ジョーンズは、主な話題はモリスに関するものだった、と回想しているからである（G B-J I 129–130）。

上に引用したロセッティの手紙は、彼がモリスの『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』に目を止めた第三の理由として、『ジャーム』との類似性を見出したことも示している。ロセッティは同年3月5日には、『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・ジャーム（O and C Germ）』と二つの雑誌をかけ合わせた名称で呼び（Fredeman II 106）、最終号が出版された12月18日には、「この雑誌は、かつて『ジャーム』の精神に満ち溢れていました。」と、回想しているからである（Fredeman II 146）。

モリスとリー・ハントのつながりが見られるのは、『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』に掲載されたロセッティの詩を通してである。同誌は全12号で、このうち3号分には、ロセッティの詩も掲載された。そしてこの詩の中には、かつてリー・ハントに称賛された詩「祝福された乙女」も含まれている（Fredeman II 101 n. 4）。

4. 批評家からみたモリスとリー・ハント

最後に、『グウィネヴィアの弁明とその他の詩』を発表したモリスに対し、1858年当時の批評家が、リー・ハントの影響を認めたことを考察したい。既に確認したように『サタデー・レビュー』はモリスの詩をキーツ、そしてラファエル前派との関連から批判し、詩のコックニー派批判をラファエル前派批判と読み替えているが、この中にモリスの詩の欠点を挙げている箇所がある。

> 芸術には細部に忍耐強い正確さを求める画家や詩人を評価する理由があり、現実であっても想像の世界であっても真実を求めるのが、文字上であってもキャンバス上であっても、芸術家の第一の務めである。しかし画家が顕微鏡を使って仕事をし、全ての木の全ての葉同様、全ての葉の斑点を書かなければならないと考えるならば、その画家は芸術とは何であるかを忘れているのみならず、芸術的な模写とは何であるかを忘れているのである。この無茶苦茶さこそ、我々が思うに、モリス氏が喜んでやっていることなのである。彼は彩色師の持つ根気強さで仕事をしているが、微細にこだわり忍耐強いと同時にグロテスクである。彼の思想や表象は正真正銘平らな板の上に表現されている。彼には距離あるいは架空の遠近法、あるいは色の濃淡、あるいは故意の悪意という概念がない。彼はこういったことを無視している。彼の作品には、鮮やかではっきりした色、くっきりとした輪郭、そしてごつごつとして、古風で扱いにくい刺繍のような言い回しを持った地模様のように下から透けて見える言葉があるが、これらは全て冷たくなっていて、わざとらしく、ぎこちない。これはちょうど2年前、深紫色に彩色された馬にまたがったイサンブラス卿がそうであったのを言葉の上で行ったものである。（*Saturday Review* 507）

最後に出てくるイサンブラス卿とは、今日「いにしえの夢――浅瀬を渡るイサンブラス卿（*A Dream of the Past: Sir Isumbras at the Ford*）」（1857）の題で知られるミレイの絵である。このように『サタデー・レビュー』は、ラファエル前派のミレイの絵を持ちだすことで、モリスの詩の特徴と、ラファエル前派の絵の特徴の共通点を見出し、モリスをラファエル前派の詩人と評して批判していると言える。

しかし、次の引用を見れば、キーツの作品にもモリス作品と似たような特徴が挙げられていることがわかる。これはリー・ハントが1817年6月に『エグザミナー』誌上で、キーツの第一詩集『詩集（*Poems*）』（1817）に対して行った書評である。

> そこには物を捉えるには必要のない細かな部分がたくさん書きこまれている。一般には変あるいは合わないと思われるものである。対象に対して、我々は顕微鏡的に述べているようになる。例えば風景の中で日光浴をしている人と、その中を、馬を駆っていく人は、全く異なった目の使い方をしている。注意は小さなものと大きなもの、細かいところと全体的を区別して払われるのではなく、同じ比率で払われる。詩におけるこの種の錯覚は、絵画で遠近法を使わず、当たるべき所に光が当たらず、影が落ちるべきところに影がないことに匹敵する。先の芸術で極端な例を挙げると、ガリバーが出会ったブロブディングナグ人のように、顔を恐ろしいくらい入念に書くデンナーのような画家がいる。また、おどけたピーター・ピンダルによれば、鳥のくちばしは20マイルであった。（Hunt 1817 No. 30 428）

リー・ハントはキーツの詩の特徴として、濃淡の付け方が特有であること、顕微鏡的であること、遠近法を用いていないことを挙げているが、これは先のモリスに対する『サタデー・レビュー』の指摘と重なっている。また、リー・ハントのキーツの詩の極端な誇張表現の例として挙げたデンナーとは、肖像画は王侯のためのものであり、市中に住む人々、音楽家、立法者、個人的な知り合いは絵画の中では、一般化し単純化して描かれていた時代に、高齢の女性や男性の皺の深さなどを表現する肖像画を描いた17, 18世紀ドイツの画家、バルタザール・デンナー（Balthasar Denner, 1685–1749）のことであり（Kucich 383 n. 7, Feigenbaum 18, 31–34）、ピーター・ピンダル（Peter Pindar）の筆名を持つジョン・ウォルコット（John Wolcot, 1738–1819）は、ロイヤル・アカデミーや国王ジョージ三世（1738–1820, 在位1760–1820）に対して批判的な風刺詩人だった（Kucich 384 n. 9, Jones 952）。このことからキーツの詩に一般民衆の存在を示唆する過剰な書き込みを見出したリー・ハントのキーツ評価は一挙に政治性を帯び、被権力者の存在の顕在化と権力への抵抗こそが、リー・ハントがキーツの詩に認めた最大の利点であったことがわかる。

しかし、リー・ハントがキーツの詩に対し指摘した顕微鏡的、遠近法を無視しているあるいは過剰な書き込みがあるなどの特質は、その部分だけ取り出すと、称賛か批判か判別がつきにくいのもまた事実であり、モリスの詩を批判した『サタデー・レビュー』は、その点を利用して、本来は称賛であるはずのリー・ハントの言葉を、意趣返し的に用いていると言える。

5. おわりに

本稿では、モリスの詩人としての側面に注目し、彼の第一詩集『グウィネヴィアの弁明とその他の詩』の発表当時の批評を再読することにより、1817年に、ジャーナリストのリー・ハントとその周辺の詩人に対して『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』の編集者、ロックハートが始めた詩のコックニー派批判が、モリスの詩集に対しても行われていることを確認した。

従来モリスの詩集への批判は、ラファエル前派批判の一環であると解釈されてきたが、その論拠となる『サタデー・レビュー』は、ラファエル前派の原型として、ワーズワスに始まり、キーツを経由してテニソンで頂点に至る一派の存在があることを指摘している。今回この批評を再考するにあたり、別の批評『スペクテーター』にコックニー派との批判があることに着目し、モリスと詩のコックニー派の関係を考察した。

最初に『サタデー・レビュー』によるワーズワスの『抒情民謡集』とラファエル前派の絵との関連から、労働者階級を想起する表現の存在が浮き彫りになった。次に、『スペクテーター』がモリスとテニソンの類似性を指摘し、詩のコックニー派についてテニソンの友人ハラムが説明していることから、テニソンとキーツとの関係、そしてテニソンとキーツを評価したジャーナリスリスト兼批評家のリー・ハントの存在が明らかになった。コックニー派批判の原因については、1848年に上梓されたキーツの伝記を参照することにより、フランス革命の先鋭化により、共和政治に対する恐怖から、それを支持したと見做されたキーツ、そして彼を高く評価したリー・ハントへの嫌悪感が、詩のコックニー派となって表出したことがわかった。

次に『サタデー・レビュー』がラファエル前派の原型と見做した一派を見直すと、ともに次世代の詩人とつながりを持ち、しかもそのつながりにおいてリー・ハントが重要な役割を果たしていることがわかる。

モリスの場合には、直接テニソンそしてリー・ハントとではなく、ロセッティを経由して繋がりがみられる。これが『サタデー・レビュー』の主張、モリスはラファエル前派であり、ラファエル前派には、原型がある、と評したことの説明となっている。この主張は、同誌がモリスの詩に、リー・ハントが見出したキーツの詩の特徴と同じ特徴を見出していることで裏付けられ、同誌はモリスを詩のコックニー派として批判していると言える。リー・ハントがキーツの詩における過剰な書き込みを一般庶民の肖像画描いたデンナーを引き合いに説明したことは、ワーズワスの『抒情民謡集』における労働者階級を想起する表現とも重なり、モリスの詩は一般庶民の存在を顕在化させるものとして、批判されたと考えられる。

註

本稿は、意匠学会の第4回デザイン史分科会ウィリアム・モリス研究会（2019年12月20日、於：慶応義塾大学日吉キャンパス）での発表「ウィリアム・モリスと詩のコックニー派――『グィネヴィアの弁明とその他の詩』を契機として」に大幅に加筆修正を施したものである。

（1）リー・ハントの本名はJames Henry Leigh Huntであるが、彼は同時代の急進的政治活動家ヘンリー・ハント（Henry Hunt, 1773–1835）と区別するため、リー・ハントの通称を用いていた。本稿に、ヘンリー・ハントは登場しないが、ラファエル前派のウィリアム・ホルマン・ハントと区別するために、この通称を使用する。

（2）このことについては、拙論「エリザベス・ギャスケルとリー・ハント――『メアリ・バートン』批判の背景」『創立30周年記念　比較で照らすギャスケル文学』日本ギャスケル協会編　大阪教育図書　pp. 87–98、「P.B. シェリーとリー・ハント――『無秩序の仮面行列』出版の背景」『人文・自然研究』13号　一橋大学　全学共通教育センター　pp. 41–56参照。

（3）拙論「テニソンとリー・ハント――『詩集』（1842）出版の背景」『人文・自然研究』14号　一橋大学　全学共通教育センター　pp. 67–86参照。

（4）同上。

（5）同上。

（6）リー・ハントは1850年の自伝で、桂冠詩人への意欲を示している（Hunt 1850 III 274–282）。彼と桂冠詩人の職務については、Stephen F. Fogle “Leigh Hunt and the Laureateship.” *Studies in Philology*, vol. 55, No. 4, Oct. 1958, pp. 603–615. *JSTOR*, www.jsor.org/stable/4173257を参照。なお、テニソンは1850年4月ジョン・フォスター（John Forster）への手紙で、『スペクテーター』で桂冠詩人の候補が二人いるとの記事を見たこと、もしリー・ハントと自分が候補なら、リー・ハントになってもらいたいと述べている（Lang and Shannon Jr I 324）。

（7）拙論「書簡にみられるGaskellのイタリア統一への関心とマンチェスター――D. G. Rossettiへの書簡を参照して――」『ギャスケル論集』第22号　pp. 31–55参照。

（8）註2のギャスケルに関する論文のp. 90参照。

引用文献

Burgum, Edwin Berry. “Wordsworth’s Reform in Poetic Diction.” *College English*, Dec. 1940, pp. 207–216. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/370370.

Chapple, John and Alan Shelston, editor. *Further Letters of Mrs Gaskell*. Manchester UP, 2003.

Faulker, Peter, editor. *William Morris: The Critical Heritage*. 1973. Routledge, 2013.

Feigenbaum, Gail. *Head Studies by Balthasar Denner*. A.B., Oblin College, 1972.

Fredeman, William E. editor. *The Correspondence of Dante Gabriel Rossetti*. Brewer, 2002.

G B-J［Georgiana Burne-Jones.］*Memorials of Edward Burne-Jones*, 2 vols. Macmillan, 1904.

［Hallam, Arthur Henry］. “On some of the Characteristics of Modern Poetry, and on the Lyrical Poems of Alfred Tennyson.” *Englishman’s Magazine* 1, 1831, pp. 616–28.

Hunt, Leigh. *The Autobiography of Leigh Hunt, with Reminiscences of Friends and Contemporaries*. 3 vols. London: Smith, Elder, 1850.

———. “Literary Notice No. 29 Poems by John Keats.” *Examiner X. 1817*. Pickering & Chatto, 1997: 345.

———. "Literary Notice No. 30 Mr. Keats's Poems, &c.— (Continued.)" *Examiner X 1817*. Pickering & Chatto, 1997: 428–429.

———. "Young Poets." *The Examiner IX 1816*. Pickering & Chatto, 1997: 761–762.

[Hunt, Leigh]. "Notices of New Books." *The Tatler*. London: R. Seton, 1831, pp. 593–594.

Jones, William R. Jones. "Wolcot, John." *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford UP, 2004: 949–952.

Kolb, Jack, editor. *The Letters of Arthur Henry Hallam*. Ohio State UP, 1981.

Kucich, Greg and Jeffrey N. Cox editors. *The Selected Writings of Leigh Hunt*. Vol. 2, Pickering and Chatto, 2003.

Lang, Cecil Y. and Edgar F. Shannon Jr, editor. *The Letters of Alfred Lord Tennyson*. Vol. 1 Harvard UP, 1981.

Lusztig, Michael. "Solving Peel's Puzzle: Repeal of the Corn Laws and Institutional Preservation." *Comparative Politics*, vol. 27, no. 4, Jul. 1995. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/422226.

Matthews, G.M. editor. *John Keats: The Critical Heritage*. Routledge: 2009.

Milnes, Richard Monkton. *Life, Letters and Literary Remains of John Keats*. 2 vols. London: Edward Moxon, 1848.

Morris, William. *The Collected Letters of William Morris*. 3 vols. Princeton Legacy Library, 1984.

"Morris's Defence of Guenevere." *Saturday Review*, 20 Nov. 1858, pp. 506–507.

Nixon, Jude V., "[M]any jewels set in dirt": Christology, "Pictures from Italy", and Pre-Raphaelite Art." *Dickens Studies Annual*, 2010, vol. 41, pp. 81–125. *JSOR*, www.jstor.org/stable/44371444.

[Phillips, Samuel]. "The Life of John Keats." *Times*, 12 Sept. 1848, p. 3.

"Publications Received." *Spectator*, 27 Feb. 1858, p. 238.

Ricks, Christopher. *The Poems of Tennyson*. 3 vols. Longman, 1969.

Rollins, Hyder Edward, editor. *The Letters of John Keats*. 2 vols. Cambridge UP, 1958.

Rose, Andrea, prefaced. *The Germ: The Literary Magazine of the Pre-Raphaelites*. Ashmolean Museum, 1992.

Rossetti, William Michael, editor. *Dante Gabriel Rossetti: His Family-Letters with a Memoir*. 2 vols. Elibon Classics, 2006.

Salmon, Nicholas and Baker. *The William Morris Chronology*. Thoemmes, 1996.

Selincourt, Ernest de, editor. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Later Years*. Clarendon, 1939.

Sharp, Michele Turner. "Wordsworth's Poetics of Speech and Language Acquisition in 'Lyrical Ballads,' *The Wordsworth Circle*, vol. 33, no. 1, 2002, pp. 14–17. *JSTOR* www.jstor.org/stable/24045015.

Stafford, Fiona, editor. *William Wordsworth and Samuel Taylor Coleridge, Lyrical Ballads 1798 and 1802*. Oxford, 2013.

Strachan, John, editor. *The Selected Writings of Leigh Hunt*. Vol. 6, Pickering and Chatto, 2003.

Z [Lockhart, John Gibson]. "On the Cockney School of Poetry, No. I." *Blackwood's Edinburgh Magazine*, October 1817, pp. 38–41.

———. "The Cockney School of Poetry, No IV." *Blackwood's Edinburgh Magazine*, August 1818, pp. 519–524.

川北稔編『イギリス史』山川出版社 2011 年。

出口保夫訳『キーツ全詩集　第一巻』白凰社 1974 年。

Abstract

William Morris and his relation to the Cockney School of Poetry : Evidence from *The Defence of Guenevere and Other Poems*

Mitsuki EZAWA

This article focuses on the aspect of William Morris as a poet, not as a designer. Peter Faulkner explains in his *William Morris : The Critical Heritage* that *The Defence of Guenevere and Other Poems*, Morris's first volume, was classified as Pre-Raphaelite poetry. However, this article argues that Morris is more properly viewed as one of the successors of the Cockney School of Poetry.

An article in *The Saturday Review* criticised the revolution Wordsworth introduced in *Lyrical Ballads*. Similar to critiques of the "prosaicness" of Pre-Raphaelite painting, the criticism was directed towards the use of vernacular language and the ignorance of poetic diction. Another review in *Spectator* classified Morris as Cockney School and suggested similarities with Tennyson. A review by Arthur Henry Hallam, Tennyson's best friend, demonstrated that the Cockney School was a scornful attribution not only to Keats, but also to Hunt, a promoter of Keats. The reason for the attacks against the Cockney School was due to the reactional conservatism after the Napoleonic War. Not only Hunt, a journalist, but also Keats, a poet, were considered republicans. Besides having contacts with other Cockney School poets, Hunt also associated with Rossetti, a Pre-Raphaelite. Hunt, therefore, was a vital link in the connection between the Cockney School and Pre-Raphaelitism. Although Hunt never reviewed the works of Morris publicly, *The Saturday Review* criticised the microscopic descriptions which Morris employed in his poems. Hunt noted the same tendency in Keats, and Hunt's reference to Balthasar Denner, a super-realistic painter, suggests that Morris used this method to make ordinary people visible as Keats did in his poems, and as Wordsworth did in his *Lyrical Ballads*. This collection of evidence suggests that Morris is more correctly classified as belonging to the Cockney School rather than amongst the Pre-Raphaelites.

人文・自然研究　第 15 号